

「NP ト」をとる「数量詞句+デ」の構文

中 島 尚 樹

1. はじめに

数量詞句 (Numeral Quantifier Phrase) は、意味的には名詞句を修飾し、その名詞句の数や量を表わす表現であるが、個体の数を表わす数量詞は、日本語では(1)のような「数量詞句+デ」(以下「NQP デ」)という形式で個体のセット(グループ)の数を表わすことが出来る。

(1) a 二人で買い物に行った。

b 三人で食事をした。

(1)の「二人で」、「三人で」などの「NQP デ」は、統語的には動作主を表わす主語を叙述しており、意味的には、述語が表わす出来事に参与する動作主が個体(人物)のセットから成り、その個体の数がいくつかということ述べている⁽¹⁾。(1a)で言えば、「(買い物に行った人は)個体(人物)のセットからなり、その数は二人である」ということを述べているわけである。このように、この構文は形式的には「個体の数を表わす数量詞句+デ」、意味的には上のような意味解釈で一つの構文として捉えられるが、実はさらにその下にある少しずつ性質の異なる構文から成っている。(1)のような例ではすぐには分からないが、この叙述的な「NQP デ」の構文は、その文の主語の性質によって大きく二つに分けることができる⁽²⁾。

(2) a 太郎と花子が二人で買い物に行った。[A1]

b 太郎が二人で買い物に行った。[A2]

c 太郎が花子と二人で買い物に行った。[A2']

d 家族で買い物に行った。[A3]

(2a)では、「二人で」の指す二人の人物が「太郎と花子」という主語の名詞句として表わされているが、(2b)では、主語の名詞句は「二人で」が指すうちの一人の「太郎」だけしか表わされていない。叙述的な「NQP デ」を分ける一つの大きな特徴は、「NQP デ」が指す個体のセットのメンバーが全て主語として表わされているか、どうかという点にある。ここでは、便宜上前者のタイプを[A1]、後者を[A2]と呼ぶことにしよう。(2c)のような「NP ト」と共に現われる「NQP デ」は、[A2]の下位タイプで、統語的には後置詞句(PP)の「NP ト」がNQPの補部として現われていると考えられるが、このタイプは[A2']と呼ぶことにする。また、ここでは取り上げないが、叙述的な「NQP デ」と関連する構文として、(2d)のような「名詞句+デ」の構文がある。(2d)は、「デ」の補部の統語範疇が異なるものの、意味的にはやはり動作主が個体のセットからなることを表わしており、意味的に「NQP デ」の構文との類似性が見られる。

これら叙述的な「NQP デ」は、共起する述語が意志的なものに限られているという点や、基本的に動作主を表わすD構造での主語を叙述していると考えられる点で、共通した性質を持っている⁽³⁾。共起する述語の統語範疇が基本的に動詞に限られているのは、前者の性質によるものである。しかし、[A1]には[A2']に相当する「NP ト」をとる下位タイプがないことから分かるように、構文の広がり方から見れば、(2)のような下位タイプに分けてそれぞれの性質を細かく調べていく必要がある。この「NQP デ」の構文は、これまで事実面での調査も十分に行なわれておらず、その統語的、意味的特徴もまだ明らかではない。ここでは、特にこの内の[A2']のタイプを取り上げて、この構文の基本的な性格を事実の上で明らかにすると共に、「動的文法理論」と呼ばれる理論の枠組みでこの構文の特殊性を構文の拡張という観点から考えてみたい。次節では、「NP ト」が「NQP デ」内部に現われることや「NQP デ」の解釈など、[A2']の構文の基本的特徴を見ることにする。3節で動的文法理論のごく簡単な説明をした後、4節では動的

文法理論の「モデル依存の拡張」という考え方を使得、[A2]から[A2']の構文への拡張の過程を考察することにしたい。

2. 「NPト NQPデ」

[A2']のタイプは、上で見たように、[A2]の下位タイプで、一見(2c)の「NPト」は共同行為者を表わす「連れ」(寺村(1982))の「NPト」のように見える。実際、この連れの「NPト」は、主文の付加詞であり、一般の動作動詞と広く共起するので、「二人で」とは無関係に(2c)の「NPト」として現われることが出来る。しかし、事実をよく調べてみると、連れの「NPト」以外にも「NQPデ」内部に現われる「NPト」も存在するということが分かるのである。では、「NPト」が「NQPデ」の内部に現われていると考えられる証拠としては、どのようなものがあるのだろうか。まず第一に、「NPト NQPデ」が名詞句内部に現われる際、「NPト」は、属格の「ノ」を伴わずに、現われることが出来るという点がある。

- (3) a 父との旅行
- b 父との二人での旅行
- c *父と旅行
- d 父と二人での旅行

(3a), (3b)の「父と」は、主文の要素として現われる連れの「NPト」と同じもので、(3c)に見られるように、名詞句内に現われる際には属格の「ノ」を伴わなければならない。(3d)で「父と」が属格の「ノ」なしで現われることが出来るのは、この要素がNPを主要部とする句の内部ではなく、NQ(P)か、PPを主要部とする句の内部に現われていることを示唆している。つまり、「二人で」の内部に現われているということを示しているのである。また、構成素であることを示すためによく使われる、疑似分裂文の焦点の位置に現われるか、どうかという点でも、「NPト NQPデ」は構成素であることを示している⁽⁴⁾。

(4) a 太郎がハワイに行ったのは、花子と二人でだった。

b 太郎が曲を作るのは、いつも花子と二人でだ。

このように、「NP ト」が「NQP デ」の内部に現われているという証拠があるわけであるが、実際に主文の付加詞として現われる連れの「NP ト」に加えて、「NQP デ」の内部に現われる「NP ト」もあるということになると、両者が共起する可能性もあるということになる。この点はどうか。

(5) a ?? 太郎は先生と昨日花子と二人で歌を歌った。

b 太郎は花子と二人で先生と歌を歌った。

(6) a ? 太郎は先生と昨日花子と三人で歌を歌った。

b * 太郎は花子と三人で先生と歌を歌った。

(5)に対する判断は、(5b)が多少すわりは悪いかも知れないが、ほぼ容認可能であるのに対して、(5a)の方は「二人で」を太郎と花子ととってもかなり悪く、ましてや、太郎と先生とする解釈では完全に非文である、とするのが一般的であろう。(6b)は、太郎と花子と先生の三人という意味では、非文である。(6a)は、非文というほどではないが、許容度はやや落ちるのではないだろうか。(5a)の許容度が落ちるのは、「NQP デ」に先行する「NP ト」は「NQP デ」が表わす個体のセットに含まれるものとして解釈されるのが普通であり、この解釈では「二人で」とは相容れないためである。これに対して、(5b)では「先生と」が「二人で」に先行しないので、このような問題は生じない。一方、(6b)は、「先生と」が「三人で」に先行していないので、「三人で」の表わす個体のセットに含まれる解釈はとれないため、太郎と花子と先生の三人という意味では非文になるのである。(6a)の許容度が落ちるのは、等位構造を用いれば、一つの「NP ト」で表わせる意味を「NP ト」を二つ用いて表わしているためではないかと考えられる⁽⁵⁾。(5b)のような例のあることから、主文の要素として現われる「NP ト」と「NQP デ」の内部に現われる「NP ト」は、条件さえ満たせば共起すると考えてよいであろう。付加詞の「NP ト」も文中で現われるのは一つだけであること

を考えると、この事実は「NQP デ」の内部に現われる「NPト」があることをはっきりと示していることになる。

さて、「NPト NQP デ」が構成素を成すことは明らかになったが、「NPト」は具体的にはどの位置に現われているのだろうか。この点は、「NPト」が現われる位置によって、「NPト」が「デ」を主要部とするPPに付加された(7a)と「NPト」がNQPの補部として現われる(7b)の二つの可能性が考えられる。

(7) a [PP [PP NPト] [PP NQP [P デ]]]

b [PP [NQP [PP NPト] NQ] [P デ]]

しかし、PPにPPを付加するという(7a)の句構造は、かなり特殊な構造で、このような構造自体がそもそも日本語に存在するか、どうか検討を要する。一方、NQPの内部構造に関しては不明な点が多いが、PPがNQPの内部に現われる構造としては、(8)などの例がある。

(8) a 東京から50km (のところ)

b コップに3杯 (の水)

(9) a 太郎が花子と二人だけで食事をした。

b [太郎が [VP [PP [NQP [NQP [PP 花子と] 二人] だけ] で]
[VP 食事をした]]

(8)は、意味関係を考えると、NQPを主要部とする修飾句として現われていると思われる。「NQP デ」内部の「NPト」も意味的にはある種の修飾句であるが、(9)のような「ダケ」の現われる例があることを考えると、「NPト NQP デ」の場合は、(7b)の構造を持つのではないかと考えられる。したがって、付加詞の「NQP デ」が動詞句に付加されているとすると、(9a)の構造は、(9b)のようになる。

(8)のようなNQPの内部に現われるものは、かなり限定されており、特定のタイプのもののみが許されると考えられるが、この点は「NPト」も同じで、その生起位置が厳しく制限されている。もし「NPト」が自由にNQP

の内部に現われるとすると、「NQP デ」の構文に限らず、他の位置に現われた NQP にも自由に現われてよいことになるが、実際には他の位置の NQP にはこの「NP ト」は現われることが出来ない。例えば、次のような同じ叙述的な NQP であっても、その内部には「NP ト」が現われることはない。

- (10) a 先生が三人の学生に会った。
 b *先生が太郎と三人の学生に会った。
- (11) a 学生が昨日三人本を買った。
 b *学生が昨日太郎と三人本を買った。
- (12) a 学生三人が本を買った。
 b *学生太郎と三人が本を買った。

(10b)-(12b)は、全て「太郎を含めた三人」の意味で解釈することは出来ない。したがって、「NP ト」が NQP の内部に現われるといっても、叙述的な「NQP デ」の構文の時にのみ現われるということになる。

このように、この「NP ト」はその生起位置が厳しく限定されており、なぜその特定の位置にしか現われることが出来ないのかという問いが生じる。一方、[A2']の構文の内部構造という点から見ると、NQP 内部に現われるのはこの「NP ト」のみに限られており、他の PP が現われることはない。この点では、なぜ[A2']の「NQP デ」の NQP は「NP ト」のみを許すのかという問いに答える必要がある。さらに、補部の位置に現われるのは一般的に主要部の項のみであるが、「NP ト」は内項を持たない NQP の補部の位置に現われていると考えられるので、この最も基本的な意味と統語構造の対応関係を破っていることになる。なぜ、このような例外的なことが起こっているのだろうか。この点は、この構文の特殊性の中でも特に理論上の大きな問題点となる。日本語の周辺的な例外的現象として、この「NP ト」を付加詞として扱い、意味と統語構造を繋ぐ対応規則をたてることも出来る⁽⁶⁾。しかし、そのような事をして、「可能な付加詞」という概

念が規定できていない限り、単なる記述であって、原理的な説明をしたことにはならない。意味と統語構造の普遍的な対応関係を破っていながら、なぜこの場合は許されるのかということに関して、一般的な原理から導かれた説明が与えられないからである。このような個別言語の周辺部の例外的な現象も、言語習得の仕組みが持つ一般的な原則の帰結として説明することはできないだろうか。以下では、動的文法理論の観点からこの問題を考えてみることにしよう。

3. 動的文法理論

動的文法理論 (Kajita (1977, 1986, 1987), 梶田 (1995-6)) では、個別言語の文法には様々な意味と形式の結合体、すなわち、構文があると考えられている。大人の文法におけるこれらの構文の種類は多種多様であるが、個々の構文はその文法の中でばらばらに存在しているわけではなく、基本的なものから派生的なものへと一定の関係で位置づけられていると考えられる。これら大人の文法に見られる構文の多様性は、これまでの理論では十分に捉えきれずにいたものであるが、動的文法理論は、言語習得の始発段階ではこの内のごく基本的なもののみが習得できるようになっており、あとは言語習得の過程ですでに習得した構文を一定の方法で「拡張」していくことで、類似の構文を増やしていくと考えている。拡張によって、基本的な構文を基にした性質の少し異なる派生的な構文が言語習得の次の段階で生まれ、それが繰り返されて行くと考えられるわけである。このような見方は、予め子供に与えられているとする言語習得に関する情報を最小限までしぼり込み、言語習得の中間段階にも言及できるような文法理論で拡張の在り方に法則性を見出すことで、言語の多様性を説明しようとしていると言える。

構文の意味と形式は、基本的にはその言語で許された一定の仕方で結び付けられているが、構文が本来持つ意味とは別の新たな意味と結びつくこ

とがあり、そのために、意味と形式の関係がずれてしまうことがある。例えば、意味的に主要部—非主要部という関係にあれば、統語構造上も主要部と非主要部として表わされるのが普通であるが、時には統語上主要部でないものが実際の意味解釈では主要部として解釈されたりする場合がある⁽⁷⁾。また、同様に、ある要素が統語上は補部ではないのに、実際の意味解釈では補部としての解釈を受けることもある。このような例の中には、本来補部をとる要素が統語上補部ではないものを補部として解釈する場合だけでなく、そもそも意味的には補部をとらない要素の場合もある⁽⁸⁾。この統語上補部ではない要素は、付加詞や修飾句など本来の意味的關係を持っているわけであるから、補部としての解釈と結び付くと、そのままの構造ではこの新しい意味關係をうまく反映しておらず、「意味と統語構造のずれ (syntactico-semantic discrepancy)」が生じることになる。このような状況が生じると、この意味と統語構造のずれを解消しようとする力が働き、「統語的再解釈 (syntactic reinterpretation)」が起こると考えられる。意味と統語構造のずれが生じている構文を「基体」とすると、統語的再解釈によって、基体とある一定の類似性を持つ構文（「モデル」）の構造が、基体と新たに結び付いた意味に結び付けられ、新しい構文（「派生体」）が作り出されるが、統語的再解釈が起こるには、その条件として基体とモデルの間にある一定の類似性が必要となる。具体的に言えば、統語的な類似性として「平らな構造の類似性 (flat structure similarity)」、意味的な類似性として「実質的な意味の同一性 (virtual equivalence)」を基体とモデルが満たす必要がある。構文の拡張の一つは、このように基体と新たに結び付いた意味と類似の意味を持つ構文において、その意味が統語的にどのように表わされているかを基にして、派生体の構造を決定するという仕方で起こり、「モデル依存の拡張 (model-dependent extension)」(Kajita (1977)) の一つと考えられている。このように、動的文法理論における統語的再解釈は、単なる構造上の組み替えではなく、構文に基づく意味と形式の組み

替えとして捉えられている点に注意する必要がある。

4. 「NPト NQP デ」への拡張

さて、このような動的文法理論の観点から見ると、「NPト NQP デ」という[A2']の構文はどのように派生したものなのだろうか。ここでは、派生体である[A2']は、基体である[A2]の構文の一部が上で述べた法則に従って統語的再解釈を受け、モデルとなる構文の一部の性質を獲得して、生まれたものであるという分析を提示し、それによってこの構文の特殊性が説明されることを示すことにする。まず、日本語の習得段階で、基体となる[A2]のタイプとモデルとなる構文、それに、連れの「NPト」はすでに存在するが、[A2']はまだ習得されていない段階がある、と仮定しよう。言い換えれば、NQPと現われる「NPト」がまだ習得されていない段階ということである。この段階で、基体となる[A2]のタイプは、連れの「NPト」と条件さえ満たせば(13)のように共起する場合がある。

(13) a 太郎は花子と二人で買い物に行った。

b [... [VP [PP NPト] [VP [PP NQP デ] ...]]]

(13b)の構造を持つ(13a)では、「NPト」は主文の付加詞として現われたものであり、(13a)の文全体の意味は、「NPト」、「NQP デ」のそれぞれの意味を合成して得られることになる。「NQP デ」の意味は、インフォーマルに言えば、すでに見たように「述語が表わす一つの出来事があり、その出来事の動作主は、主語を含む個体(人物)のセットからなり、そのメンバーの数はxである」のxにNQの数を入れて得られると考えられる。(13a)の場合、「買い物に行ったという一つの出来事があり、その出来事の動作主は、太郎を含む人物のセットからなり、そのメンバーの数は二人である」という意味になる。一方、「NPト」の方も、意味的には述語が表わす主となる出来事と「NPト」のNPを動作主とする二次的な出来事が全体で一つの出来事として捉えられており、「NPト」を含む文の動作主は、主語として表

わされたものと「NP ト」として表わされた準動作主から成るセットであると言える。(13a)の意味はこれらを合成して得られるが、ここで注意すべき点は、ここに出て来る二つの「動作主のセット」は、共に主語を含むものの、本来別々のものを指すということである。「NP ト」の準動作主が「NQP デ」の表わす個体のセットに含まれるという意味自体は、どちらか一方の構文の意味から出てくるというわけではない。事実、すでに見たように、「NP ト」が「NQP デ」に先行する場合は、「NQP デ」が表わす個体のセットに「NP ト」の NP が含まれるのが普通であるが、先行しない場合は NP を含む解釈をすることは難しい。

- (14) a 太郎は三人で(その)ガイドさんと海岸にある洞窟へ行った。
 b 太郎は三人で先生とその雑誌を作った。

(14a)では、「三人」は「ガイドさん」ではない、談話上すでに出てきている人物三人を指すととる方が自然であり、指示詞「その」を加えた「そのガイドさん」では、「そのガイドさん」を「三人」に含める解釈は出来ない。(14b)でも、同様に「先生」を含む解釈は難しい。この事実は、[A2]の構文の意味としては、本来「NP トの NP が NQP デが表わす個体のセットに含まれる」というところまでは指定されておらず、(13a)の解釈で「花子」が「二人」に含まれるのは、「NQP デに先行する連れの NP トの NP は、NQP デが表わす個体のセットに含まれる」という語用論的な解釈によるものであることを示している⁹⁾。しかし、「NP ト」が「NQP デ」に先行する(13b)の構造では、本来の「動作主は (D構造での) 主語を含む個体のセットからなる」という[A2]の構文自体の意味だけでなく、「NP トの NP は NQP デが表わす個体のセットに含まれる」という意味が常に生じるので、次の習得段階ではこの意味も(13b)の構造を持つ[A2]の構文自体の意味として組み込まれたと考えられる。語用論的な意味が文法化し、(13)は新たな意味と結び付いたわけである。この段階になると、本来の意味関係を反映した(13b)の構造とこの新たに結び付いた意味との間で、上で述べた意

味と統語構造のずれが生じると考えられる。そのため、このずれを解消するために統語的再解釈が起こるのである。

では、統語的再解釈のモデルとしては、どのようなものが考えられるだろうか。モデルは、この段階ですでに存在し、意味と形式の面で(13a)のタイプと十分な類似性を持つものでなければならない。そして、派生体の[A2']よりも構文としてはより基本的なものでなければならない。このような条件を満たす構文として、次の(15a)のような「NPトイッショニ」がある。

- (15) a 太郎は花子といっしょに買い物に行った。
 b [... [VP [PP [[PP NPト] イッショ] ニ] ...]]

- (16) a 太郎と花子がいっしょに買い物に行った。
 b 太郎は、いっしょに買い物に行った。

「イッショニ」も、「NQPテ」の[A1], [A2]のように、動作主が全て主語としてあらわされる(16a)のようなタイプと動作主の一部のみが主語として表わされている(16b)のようなタイプに分けることが出来るが、ここでモデルとなるのは、「イッショニ」が「NPト」を補部として伴う(15)のようなタイプである。このタイプは、「述語の表わす出来事の動作主は、主語と補部のNPが指す個体(人物)のセットからなる」という意味を持つ点で、基体と結び付いた意味に非常に近い。事実、(13a)と(15a)では実質的な意味の差はほとんどなく、統語的再解釈の条件となる「実質的な意味の同一性」を十分満たしていると考えられる。(16b)の「イッショニ」は談話上から準動作主が決定されるが、(15a)では、この準動作主が「NPト」の形で統語的に現われている。つまり、この「イッショニ」は、動作主となる個体のセットに主語以外の人物がいることを意味し、「NPトイッショニ」の「NPト」はこの意味を補部として明示したものである。統語的に見れば、(13b)と(15b)の類似性は、NQP, 「イッショニ」をX, 「テ」, 「ニ」をPとして、(17)のような平らな構造の類似性として捉えることが出来

る。

(17) [NP [NP ト] X P VP]

(17)は、基体とモデルの持つ構造（(13b)と(15b)）の内の一部の支配関係等を捨象して統語的類似性を表わしたもので、統語的にも基体とモデルには十分な類似性があると言える。

このように、意味的にも統語的にも基体との類似性を持ち、モデルとしての条件を満たす「NP トイッシュヨニ」が存在していることにより、モデルで実現している統語構造を基体の新しい意味に結び付けて、基体とモデルの性質を合わせた新たな構文が作られることになる。これが、(15b)をモデルにした(13b)から(18b)への統語的再解釈である。

(18) a 太郎は花子と二人で買い物に行った。

b [... [VP [PP [NQP [PP NP ト] NQP] デ] ...]]

このような統語的再解釈を動機づけるものとしては、意味と統語構造のずれだけでなく、「イッシュヨニ」、「NP トイッシュヨニ」という対に対して、「イッシュヨニ」には対応する「NQP デ」があるが、「NP トイッシュヨニ」には対応する「NP ト NQP デ」という表現が欠けており、この空所を埋めようとする力も働いていると考えられる。この統語的再解釈によって、[A2']の「NP ト NQP デ」という構文が生じることになるが、この構文は、「NQP デ」の構文として見れば、[A2]の一つの下位構文として位置づけられ、その性質はこの統語的再解釈による帰結として説明することが出来る。

では、具体的にこの構文の特殊性はどのように説明されるのだろうか。以下、この点を見てみよう。まず、この分析では、本来補部を持たないNQPの補部の位置になぜ「NP ト」が現われるのかという問題に関して、どのような説明を与えることが出来るのだろうか。この問題を意味と形式の結合という観点から考えてみよう。モデルの「イッシュヨニ」は意味的には項を持つ述語であり、この事は、(16b)のような「NP ト」が現われていない例では、意味的に欠けている部分があると感じられることから明らかであ

ろう。一方、「NPトのNPが動作主である個体のセットに含まれる」という基体の新しい意味と類似の意味が、モデルの「NPトイッショニ」にも含まれている。したがって、「イッショニ」が項を持つために、モデルの「NPトイッショニ」では、主要部—補部という統語的な関係がこの意味とも結び付いていることになる。つまり、統語的再解釈の前の段階で、基体の新しい意味と似たこの意味が、モデルでは主要部—補部という実現の仕方をしているので、派生体の構造もこれに倣って主要部—補部という構造になったというわけである。この統語的再解釈による説明は、「ある意味が統語的にどのように実現するかは、その段階の文法でそれと類似の意味が統語的にどのように実現されているかによって決まる」（梶田（1995-6））ということの一例であり、一見非常に例外的な[A2']のこの性質も、動的文法理論の観点からは、当然の帰結ということになる。

次に、NQPの補部に現われるのが、なぜ「NPト」だけに限られているのかについて考えてみよう。例えば、「NPカラ」も「NPト」と同じPPであり、(19a)の「NPカラ」を含む文も連れの「NPト」を含む例と変わりはないように見える。しかし、「NPカラ」の場合は統語的再解釈が起こらない。これは、なぜであろうか。

- (19) a 花子は学生時代から三人で東京のラーメン屋めぐりをしてきた。
 b 花子は学生時代からの三人で東京のラーメン屋めぐりをしてきた。
- (20) a *花子は卒業後学生時代から三人で東京のラーメン屋めぐりをしてきた。
 b 花子は卒業後学生時代からの三人で東京のラーメン屋めぐりをしてきた。

(19b)の「学生時代からの」がNQP内の要素で、意味的にも「三人」にかかっており、「学生時代からいっしょの三人」という意味を表わしているの

に対して、(19a)の「学生時代から」は主文の要素であり、このために同じ主文の要素で時を表わす「卒業後」などが出てくると、意味的にかみ合わないために(20a)のように非文になる。このことは、(19a)の「学生時代から」は NQP 内部の要素ではなく、「学生時代から三人で」も構成素ではないことを示している。問題の統語的再解釈は、「NP ト」が、「NQP デ」が表わす個体のセットのメンバーであるという意味を持つことが前提になるので、モデルの意味と似たこの意味関係が得られない(19a)の「NP カラ」などは、統語的再解釈を受けることはないのである。また、統語的にも平らな構造の類似性(17)には「ト」という後置詞が明示されているが、(19a)は、この点でも(13a)と比べると、モデルとの類似性が低いことを示している。

一方、[A2']を「NP ト」の構文という観点から見れば、この構文に現われる「NP ト」は、連れの「NP ト」とは統語的、意味的に似てはいるものの、その分布や意味解釈では異なる別の「NP ト」ということになる。連れの「NP ト」は、その分布が基本的に意志的な行為を表わす動詞句や名詞句に限られているわけであるから、そのような意味を表わさない NQP と現われるこの「NP ト」を同一視することは出来ない。特に、この「NP ト」の場合、以下の例に見られる通り、その分布が非常に制限されている。例えば、(18b)の構造では、「NQP デ」は PP となるが、主要部は「デ」という特定の後置詞でなければならない。したがって、「デ」を伴わない(10b)-(12b)のような NQP だけの構造や、(21)のような「デ」以外の後置詞の補部として現われると、非文になる。同様に、(22)や(24)が示すように、「NQP デ」であれば、どのようなものでも良いというわけではない。これらの性質も、ここでの統語的再解釈から直接導きだすことが出来る。

(21) a * 太郎は花子と二人からプレゼントをもらった。

b * 太郎は花子と二人にその本を読んでやった。

(22) a * (太郎が)次郎の花子と三人でハワイへ行った。

- b * 太郎と次郎の花子と三人でハワイへ行った。
- (23) a 太郎と次郎と花子の三人でハワイへ行った。
- b [... [PP [NQP NP ノ NQP] デ] ...]
- (24) a * 僕達は先生と {みんなで/全員で} 歌を歌った。
- b 僕達は {みんなで/全員で} 先生と歌を歌った。

(21)で統語的再解釈が起こらないのは、(17)の構造的な条件は満たしていても、「動作主である個体のセットに含まれる」というモデルの持つ意味と似た解釈が得られないためである。したがって、ここでの分析に従えば、当然統語的再解釈も起こらないことになる。実際、(21)は、「花子」を「二人」に含めるという解釈自体が得られず、この意味では非文である。(22)は、ここで扱っている叙述的な「NQP デ」とは異なる指示的な「NQP デ」の一つであり、このタイプでは(23a)のように「NQP デ」が指す個体のセットのメンバー全てが「NPト NP...ノ」という形で表わされなければならない。したがって、このタイプでは、個体のセットのメンバーはすでに「NPト NP...ノ」という形で統語的に明示されているので、そもそも「NPト」のNPをメンバーに含むという解釈をする余地がないということになる。同様に、「みんなで/全員で」が「先生」を含む解釈で(24a)が非文なのも、「みんなで/全員で」の場合は、動作主が全て主語として現われており、そのような解釈がないためである。そもそも、「NPトのNPがNQPデの表わす個体のセットに含まれる」という解釈は、「NQPデ」で表わされている個体のセットのメンバーの一部しか主語として表わされていないということが前提になるので、[A1]のようなタイプではこの前提自体を満たさないのである。このように、この「NPト」の分布が極端に制限されているのは、基体とモデルが構造的な条件だけではなく、「実質的な意味の同一性」という意味的な条件も満たさなければならないからである。これは、統語的再解釈が単に構造だけでなく、特定の意味と構造を指定して起こっていることを示すものであり、「構文」の必要性を示していると言える。

5. おわりに

本稿では、「NQP デ」の構文のうち、特に「NP ト」をとる「NQP デ」の構文を取り上げて、その意味的、統語的性質を事実の観点から整理するとともに、この構文の持つ理論上の問題点を指摘し、動的文法理論による分析を示した。この分析では、特に理論上問題となる、なぜ補部を持たないNQPに「NP ト」が補部として現われることが出来るのかというこの構文の特殊性も、モデル依存の拡張の結果として説明することが出来た。そして、この「NP ト」が、様々な論理的可能性のうち、なぜ「NQP デ」という特定の構文にのみ現われるのかという、この「NP ト」の限定された生起位置や、なぜ「NP ト」だけが[A2']の「NQP デ」の内部に現われることが出来るのか、という点に関しても原理的な説明を与えることが出来た。もちろん、これで[A2']の構文の全ての性質が解き明かされたわけではないが、ここでの議論は、動的文法理論が言語習得の仕組みが持つ一般的な原則の帰結として、このような日本語の周辺部で起こっている例外的な現象にも原理的な説明を与えてくれることを示していると言えるであろう。

注

- (1) 叙述的な「NQP デ」には、以下の例のように、動作主以外の意味役割を持つ主語を叙述するタイプもあるが、構文としてはやや性質が異なると思われるので、ここでは動作主を表わす主語を叙述するもののみを取り上げて、論じることにする。
- (i) a このハンカチは、三枚で2,000円だ。
b この荷物は二つで6 kg だ。
- (2) ここでは叙述的な「NQP デ」のみを扱うが、「NQP デ」の構文の中には (ia-c) のような指示的なタイプもあり、このタイプでは (ic) に見られるように「太郎と花子」のような純粋な名詞句も現われることが出来る。この構文の「デ」は、「動作主を表わす『デ』」などと呼ばれることがあり、(id) に見られるように、その前の名詞句が「二人以上の人物を表わしていなければならない」という特殊な制約があることが知られている。
- (i) a その二人で机を運んだ。

- b 太郎と花子の二人で机を運んだ。
- c 太郎と花子で机を運んだ。
- d *太郎で机を運んだ。

この構文の特徴、及び、なぜこのような制約があるのかに関しては、Nakajima (印刷中)を参照されたい。

- (3) 「NQP デ」の叙述の対象は、基本的には動作主で、主語である名詞句であるが、この事は、一方のみを満たすものが必ずしも非文になるということではない。主語という性質のみを満たす受動文の主語や、動作主という点のみを満たす受動文の「NPニ/ニヨッテ」でも、解釈によってはかなり許容度が高い場合がある。例えば、(iic)の許容度はかなりよい。また、(ia)の例も、太郎と次郎が意図的に二人で叱られようとしたという解釈では、その出来事のあり方をコントロールする力が「太郎と次郎」にあるととられ、(動作主の解釈に近づくので) (ia)はそれほど悪くないように思われる。

- (i) a ? 太郎と次郎は、先生に二人で叱られた。
- b ?? 太郎は、先生に二人で叱られた。
- (ii) a ?? 山田先生は学生に二人で殴られた。
- b * 山田先生は太郎に二人で殴られた。
- c ? そのビルは、山田と田中によって二人で設計された。
- d * そのビルは、山田によって二人で設計された。

しかし、一般的に言えば、これらの場合は動作主で、主語という二つの条件を満たしているより基本的な場合よりも許容度は低いと言える。

- (4) 動詞(句)が疑似分裂文の焦点の位置に現われないことを考えると、この例は、「NPト NQP デ」が構成素であることを示すとともに、その統語範疇が動詞句ではないことも示唆しているものと考えられる。ここでは、叙述的な「NQP デ」の「デ」を後置詞として話を進めるが、「NQP デ」の「デ」の統語範疇に関しては、コンピュータの動詞「デ」から後置詞「デ」への連続性の中でその性質を捉えていく必要があると思われる。

- (5) この制約は、「NQP デ」が関わる場合だけでなく、連れの「NPト」のみの場合にも見られる。

- (i) a 太郎は花子と次郎とその映画を見に行った。
- b * 太郎は花子とその映画を次郎と見に行った。
- c * 太郎は花子と昨日次郎とその映画を見に行った。
- d * 花子と昨日太郎は次郎とその映画を見に行った。

このような現象は、基本的には(ia)のような等位構造を用いた表現があるために、同じ付加詞が重出して使われている(ib-d)のような表現が出て来られ

- ない、所謂「阻止 (Blocking)」の一例ではないかと考えられる。
- (6) このようなアプローチとしては、Jackendoff (1990)を参照されたい。
- (7) このような「主要部—非主要部の衝突 (head-nonhead conflict)」とそれによって導入される統語的再解釈の具体例に関しては、英語では、Kajita (1977)など、日本語では、中島 (1993)を参照されたい。
- (8) 前者の事例としては、例えば、Omuro (1985)を参照されたい。
- (9) 実際には、「NQP デ」が表わす個体のセットに含まれると解釈されるのは連れの「NP ト」だけではないが、ここでは今問題となっている部分にのみ絞って話を進めることにする。

参考文献

- Jackendoff (1990) *Semantic Structures*, MIT Press.
- Kajita, Masaru (1977) "Towards a Dynamic Model of Syntax," *Studies in English Linguistics* 5, 44-76.
- Kajita, Masaru (1986) "From Periphery to Core: A Research Strategy," paper presented at the September meeting of Tokyo Circle of English Linguistics.
- Kajita, Masaru (1987) "'Grammatical Construction' in Dynamic Syntax," paper presented at the October meeting of Tokyo Circle of English Linguistics.
- 梶田優 (1995-6) 「理論言語学講座 生成文法特論」 東京言語研究所.
- 神尾昭雄 (1983) 「名詞句の構造」 井上和子(編) 『日本語の基本構造』, 大修館書店, 77-126.
- 菊池朗 (1991) 「日本語の二次述部」 安井稔博士古稀記念論文集編集委員会 (編) 『現代英語学の歩み』, 開拓社, 212-220.
- 北原博雄 (1996) 「連用用法における個体数量詞と内容数量詞」 『国語学』 186集, 76-63.
- Koizumi, Masatoshi (1994) "Secondary Predicates," *Journal of East Asian Linguistics* 3, 25-79.
- Laserson, Peter (1990) "Group Action and Spatio-Temporal Proximity," *Linguistics and Philosophy* 13, 179-206.
- Martin, Samuel E. (1988) *A Reference Grammar of Japanese*, Charles E. Tuttle Company, Tokyo.
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』, 角川書店.
- 中島尚樹 (1993) 「例示の『ような/ごとき』の派生的用法について」 『ソフトウ

- エア文書のための日本語処理の研究—12』, 情報処理振興事業協会, 157-189.
- Nakajima, Naoki (印刷中) “Agentive *de* in Japanese : A Dynamic Approach,”
太田朗先生傘寿記念論文集編集委員会(編), *Studies in English Linguistics :
For Akira Ota*, 大修館書店.
- 沖久雄 (1986) 「数詞・助数詞の文法」『日本語学』5 : 8, 15-25.
- Omuro, Takeshi (1985) “‘Nominal’ If-Clauses in English,” *English Linguistics*
2, 120-143.
- 竹沢幸一 (1991) 「場所, 着点および二次的述語の『に』」 安井稔博士古稀記念
論文集編集委員会(編)『現代英語学の歩み』, 開拓社, 232-242.
- Takezawa, Koichi (1993) “Secondary Predication and Locative/Goal
Phrases,” *Japanese Syntax in Comparative Grammar*, ed. by N. Hasegawa,
45-77, Kurosio, Tokyo.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』, くろしお出版.